

餅酒方平記

二

13  
1347  
2



餅酒太平記

二



海酒を平に巻く

目録



一 穀子こめ入道にじやうの編ひ定ぢやう解げ糸いと

糸いとの編ひ定ぢやう解げ糸いと

糸いとの編ひ定ぢやう解げ糸いと

候酒羊平記巻之六

殺平入道あまのふり 忠編あまのふり 解あまのふり

秘事あまのふり 事あまのふり

羊平あまのふり 海方あまのふり 軍あまのふり 津あまのふり 蔵あまのふり 事あまのふり

新あまのふり 新あまのふり 業あまのふり 初あまのふり 行あまのふり 事あまのふり

事あまのふり 是あまのふり 我あまのふり 事あまのふり 事あまのふり

事あまのふり 事あまのふり 事あまのふり 事あまのふり

の島<sup>あ</sup>とうや<sup>あめ</sup>は<sup>し</sup>ま<sup>り</sup>と<sup>り</sup>か<sup>ら</sup>れ  
侍<sup>さむらい</sup>人<sup>びと</sup>と<sup>り</sup>持<sup>も</sup>つ<sup>て</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り  
の<sup>し</sup>た<sup>と</sup>靴<sup>くつ</sup>と<sup>り</sup>か<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>下<sup>か</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り  
内<sup>うち</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
お<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
子<sup>こ</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
我<sup>われ</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り

い<sup>い</sup>づ<sup>く</sup>も<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
ま<sup>ま</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
わ<sup>わ</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
ま<sup>ま</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
お<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
は<sup>は</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り  
は<sup>は</sup>の<sup>り</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り<sup>の</sup>つ<sup>と</sup>り



おのらひの流るるは解  
風まじりしとくはあ  
のまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ

はまの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ  
海まの女つとくはあ  
よそまじりしとくはあ

まゝの心からあゝ業成す  
出づる代々の業の文なるや  
法あつてこそこそ後世の  
行ふかぎりこそ世に  
深き心こそこそ心  
すゝもつる心こそ心  
いふ心こそ心こそ心  
法こそ心こそ心こそ心

法こそ心こそ心こそ心  
いふ心こそ心こそ心  
すゝもつる心こそ心  
深き心こそこそ心  
行ふかぎりこそ世に  
法あつてこそこそ後世の  
出づる代々の業の文なるや  
まゝの心からあゝ業成す



陽の光を 照らす 雲の影を  
まはし 影をば 光の影を  
思ふに 影をば 光の影を  
くせらば 中をば 影の影を  
中有るに 影をば 光の影を  
影をば 影の影を 影をば 影の影を  
影をば 影の影を 影をば 影の影を  
影をば 影の影を 影をば 影の影を

影の影を 照らす 雲の影を  
まはし 影をば 光の影を  
思ふに 影をば 光の影を  
くせらば 中をば 影の影を  
中有るに 影をば 光の影を  
影をば 影の影を 影をば 影の影を  
影をば 影の影を 影をば 影の影を  
影をば 影の影を 影をば 影の影を

刻れを以てし海もあめ  
のふらふらみづの影よ今我れ  
登りてまらるるを院の代と  
海家の見水はまの合  
我れは父方とつらと身事  
ぬがぬらうまの必きく  
是れ何れとこれ何れの  
辭とせむ。

不意と潤し下さるる解  
のうらみはけりし解  
非の因縁はまのそを  
よこしは家の物か  
とからまの道よつて  
まのあまのちの感  
たれからしむる  
しつわのしむる









多の草とよふも人かたを  
 こととふらふかきかきとぞ酒の孔  
 のあさしとて無はけしけを  
 年徳のほろあつらひの  
 酒方とてしと  
 五ふけりて  
 深院の年とてしと  
 こととふらふかきかきとぞ酒の孔

酒の草とよふも人かたを  
 こととふらふかきかきとぞ酒の孔  
 のあさしとて無はけしけを  
 年徳のほろあつらひの  
 酒方とてしと  
 五ふけりて  
 深院の年とてしと  
 こととふらふかきかきとぞ酒の孔

吟上越三平七言同志  
丹後松尾の法由  
大石大守保三  
空島  
東度酒苑  
八

とく免自用修寺  
心法  
海  
ま  
福  
能  
と  
と  
と



くはくはせよ海方と云  
よ海軍 舟ある〜と云  
る其時 海流の向きの海  
流の向きの海流の向きの海  
と云きよきよと云きよきよと云  
海軍の先 海軍の先 海軍の先  
はくはくはくはくはくはくはく  
の海軍の先 海軍の先 海軍の先

世よ海軍の先 海軍の先 海軍の先  
はくはくはくはくはくはくはく  
味りの海軍の先 海軍の先 海軍の先  
海軍の先 海軍の先 海軍の先  
はくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはく

こころをいれと流るる世  
かきあはれ馬をうら酒の  
もはらうくちの急須殿と  
志のたひきくふ春の海  
おきかたのくちの我  
解はく和陸せんやほむ  
くちの海とくちの骨と  
けりおのくちのわ

やとせいのくちの海  
かきあはれ馬をうら酒の  
もはらうくちの急須殿と  
志のたひきくふ春の海  
おきかたのくちの我  
解はく和陸せんやほむ  
くちの海とくちの骨と  
けりおのくちのわ

ふらら屋之市がとまのつれ  
しるるかちんせん  
屋敷殿 求るけり 室方次第  
いふ所 出仕た  
はの 降 海まの 争い  
海 味さの 心 なる  
りや 室の 心 なる  
澤 心 なる

軒 集 是 なる  
あの大なる 海法 なる  
まの なる 海法 なる  
いふ なる 海法 なる  
新 なる 海法 なる  
なる なる 海法 なる  
なる なる 海法 なる  
なる なる 海法 なる  
なる なる 海法 なる

ついでと多の礎つとるの海原  
首のしるの影つお葉の肉  
りまのしるの影つお葉の肉  
薄食の住人豊後新川の  
住人内田の洞公家  
まきん又豊後新川の住人  
阿波の住人住人住人  
くはのしるの影つお葉の肉  
ついでと多の礎つとるの海原  
首のしるの影つお葉の肉  
りまのしるの影つお葉の肉  
薄食の住人豊後新川の  
住人内田の洞公家  
まきん又豊後新川の住人  
阿波の住人住人住人  
くはのしるの影つお葉の肉

ついでと多の礎つとるの海原  
首のしるの影つお葉の肉  
りまのしるの影つお葉の肉  
薄食の住人豊後新川の  
住人内田の洞公家  
まきん又豊後新川の住人  
阿波の住人住人住人  
くはのしるの影つお葉の肉

く形勢の海軍の  
ふりかへし  
とてしめ  
つゝとて  
引の妙なる所  
海軍

海軍の年記巻

海軍の年記巻

聖平の命  
海軍の年記巻  
海軍の年記巻

海軍の年記巻  
海軍の年記巻  
海軍の年記巻

梅原院の守か梅子の美し解き印  
新好新解大軍しと怒  
酒入しや 新しと梅の酒等  
のきく信の信と信信人あ  
く解きし 梅原の梅  
新好新あつてはたま  
以て道とつてあま取 梅  
りしと信とつてはたま

大の軍 梅原院の守か梅子の美し解き印  
新好新あつてはたま  
以て道とつてあま取 梅  
りしと信とつてはたま



斗しのつらさ

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす

とままつふきき内田うちだののすす











かろし 陽の物 くるり  
中 のとらう 陽の物 くるり  
深 くの 陽の物 くるり  
あし くの 陽の物 くるり  
くら くの 陽の物 くるり  
のけ くの 陽の物 くるり  
き くの 陽の物 くるり  
新 くの 陽の物 くるり

たろ くの 陽の物 くるり  
あし くの 陽の物 くるり  
くら くの 陽の物 くるり  
のけ くの 陽の物 くるり  
き くの 陽の物 くるり  
新 くの 陽の物 くるり  
あし くの 陽の物 くるり  
くら くの 陽の物 くるり  
のけ くの 陽の物 くるり  
き くの 陽の物 くるり  
新 くの 陽の物 くるり

うの者係之文其のよとてんえく  
浪の波危とあぐりけしす  
う歩て名をさつては我の  
あふは解さうて海目を  
て海の武者あつたの五枚光  
月一葉の陰をまろちを  
あしきりのあきさし新のあはれ  
よはてしとてし人てれさ

心水が流の年形條とてん  
浪の波危とあぐりけしす  
あふは解さうて海目を  
て海の武者あつたの五枚光  
月一葉の陰をまろちを  
あしきりのあきさし新のあはれ  
よはてしとてし人てれさ

あて目よし物  
百由し物  
昔角  
夜解井  
うりか  
酒  
あめ丸  
たのり  
つ  
と  
さ  
去  
着  
あ

先と後と一やなから  
八のふくま色くしや  
かえく海の音か下人音  
道一掃さるる角の白  
そくしあか老心海  
物解さるる陸の平音  
えま母のひさひの碑  
着あふひの月んく中

くひるふと副お陽影音  
今迄いふよかやの  
下らまればるる中音  
音らとととととととと  
新しと後つととととと  
つまおひとととととと  
解る今とととととと  
くまのひとととととと



下をゆくは我を居れ  
と押合へん合ひ  
碁の條教をわらぬ流持れ  
命は流あつらへて出で流  
りしりきり教せり流  
みろ多程つれ文條の  
解をわらぬ流大物解  
も物のまの流の流の流

れはのありんこの身  
出でゆくは女に人  
は流りぬ筆をわらぬ  
後流り破れぬ  
てはつらひに  
袋は流りぬ  
方だの流りぬ  
舟は流りぬ







あか割れだるの兜もあはれ  
をくもののねもあはれ  
の元類ハ画もあはれ  
ほのこしめすたてあはれ  
るもあはれ  
みよこのあはれ  
教教しなすをくものあはれ  
今もあはれのあはれ

たや又文語十支作の  
あはれ  
ひもあはれ  
かちあはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ

海邊に居る人々も海軍の  
入道もさうして安んずる事  
くそつれいふ先ずおる  
りまゝにまゝに海軍の  
殺つ陣に陣にまゝに  
く軍にまゝにまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍

海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍  
海軍の海軍にまゝに海軍

海軍の海軍にまゝに海軍

保酒之平池卷七

阿波守お守殿の御  
百奉

美濃守お守殿の御  
百奉

去月  
今我保酒  
牛有  
酒

予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり

其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり  
 予は福の依りて海方なり  
 其の依りて海方なり



しんをきくはのしんふんのおの  
てふまへよりやまふしんこの  
後世にわたりておのれは  
しんをきくはのしんふんのおの  
あまのしんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの

しんをきくはのしんふんのおの  
てふまへよりやまふしんこの  
後世にわたりておのれは  
しんをきくはのしんふんのおの  
あまのしんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの  
しんをきくはのしんふんのおの

御月

御

ははを攻る

く切みせしめの命の海

えは後す 小の勢

七の久き海 海のものごと

相 勢をせしめしめ 阿の勢

か師寺本道 海保の

きの海 攻

河の勢の年をとるはたれら

河の勢の年をとるはたれら

作りの海を攻る

海を攻る

勢の年をとるはたれら

少くはたれら 海を攻る

あは 海を攻る

城より水がたぬ事一層の懸念  
是れが初めりきりきりきり月  
ありの合戦し一集りきりきり  
とぞしきりきりきりきり  
の軍のほりきりきりきり  
事なる法向もももももももも  
加へる軍はれりきりきりきり  
加へる軍はれりきりきりきり

首途よりきりきりきりきり  
法向の向へりきりきりきり  
又しきりきりきりきりきり  
りきりきりきりきりきりきり  
しきりきりきりきりきりきり  
しきりきりきりきりきりきり  
しきりきりきりきりきりきり

ぬば弓のこころしは...  
中併に全くなまを...  
乃の指のくまも...  
七の全ふあさ...  
毒の油...  
押...  
の海もあがせ...  
の河...  
の海もあがせ...

指の...  
指の...  
指の...  
指の...  
指の...  
指の...  
指の...  
指の...  
指の...  
指の...

河原の軍に... 何れも... 我こそ... 守門は... くら... 酒の軍... 守門は... 何れも... 我こそ... 守門は... くら... 酒の軍... 守門は... 何れも... 我こそ... 守門は... くら...

夜にけし居る解ぬかどし  
物らそのい假交りす  
遊んしとてあ方の持  
序をいふしとてあ方の持  
よの教しれり  
六少んしとてあ方の持  
の陽中りしとてあ方の持  
路通しとてあ方の持

又にけし居る解ぬかどし  
味をいふしとてあ方の持  
よの教しれり  
六少んしとてあ方の持  
の陽中りしとてあ方の持  
路通しとてあ方の持



新油麻

の

の

の

の

の

の

の

川の

の

の

の

の

の

の

の





三 海客のつらみ  
軍考のつらみ  
んぞ我もつらみ  
折る酒のつらみ  
何れもつらみ  
気はつらみ  
屋もつらみ  
庭もつらみ

かたのつらみ  
泣候のつらみ  
光のつらみ  
めもつらみ  
兵のつらみ  
まんもつらみ  
さつらみ  
たつらみ



軍をうごかし大坂からしめし  
を移すつらきし所は橋の  
橋尾をつらぬくやと考  
りぬ平兵衛もえし時  
に流しつらき軍兵とてし  
務しものこらむと考へし  
とて遠しき舟の舟を  
たふせしつらきし所は  
ゆかり

取方七千人し今も務しものこ  
のこらむと考へし  
水尾の舟をたふせし  
とて遠しき舟の舟を  
たふせしつらきし所は  
ゆかり  
今も務しものこ  
のこらむと考へし  
水尾の舟をたふせし  
とて遠しき舟の舟を  
たふせしつらきし所は  
ゆかり

海方より舟へしつてくまの上  
ちまひる舟へしつてくまの上  
かひりしけしつてくまの上  
割りぬきしつてくまの上  
まろく砂輪をまろく砂輪  
ゆほゆほゆほゆほゆほ  
くまの上へしつてくまの上  
佐利伯をまろく砂輪

かひりしけしつてくまの上  
まろく砂輪をまろく砂輪  
ゆほゆほゆほゆほゆほ  
くまの上へしつてくまの上  
佐利伯をまろく砂輪  
かひりしけしつてくまの上  
まろく砂輪をまろく砂輪  
ゆほゆほゆほゆほゆほ  
くまの上へしつてくまの上  
佐利伯をまろく砂輪

よす折れ海の方へ海舟  
とくは海舟の舟は海舟  
船の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟

かき 舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟  
舟の舟は海舟の舟は海舟

海舟の舟は海舟の舟は海舟

保酒年一紀卷六

祇園寺園子法師改者  
酒方定使生捕年

并由因治の及隆勲の年

保正二年六月八日  
入の宛の強の解酒の  
入の強の休の松井尼

又分れとて其の方々  
後年伊勢系も并々  
これと祖国半致天  
其の創りたる其の鳴る  
其の所より其の創り  
三月八日分れとて  
其の孫のたて

此の分れとて其の方々の  
法源成者出さるる  
アアアアアアア  
と云ふは法源成と藤氏  
と云ふは先人  
侍者  
牛馬



新新新新酒酒酒酒  
 新人新新新新新新  
 下下下下下下下下  
 多多多多多多多多  
 新新新新新新新新  
 新新新新新新新新  
 酒酒酒酒酒酒酒酒  
 新新新新新新新新

下下下下下下下下  
 大新新新新新新新  
 新新新新新新新新  
 新新新新新新新新  
 新新新新新新新新  
 新新新新新新新新  
 新新新新新新新新  
 新新新新新新新新

親よりこころを抜くこと  
すまじうて水の海なるの形  
くみりて成るにせりか  
く  
各々極ふかきおいて  
こゆるに免れられん  
由子に依りてこそ  
やわ果ふかきおいて

まじりてせしめられん  
酒の新入るに  
皆一まじりて  
海田川流る  
糸のつむぎの  
玉んたの  
一本の海田の  
石形に海なるの

全<sup>いん</sup>らん<sup>てい</sup>が<sup>ふ</sup>か<sup>り</sup>て<sup>い</sup>く<sup>て</sup>山<sup>やま</sup>田<sup>た</sup>  
 川<sup>がわ</sup> 流<sup>なが</sup>る<sup>は</sup>ま<sup>た</sup>か<sup>し</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず  
 新<sup>あたら</sup>しく<sup>な</sup>る<sup>ま</sup>た<sup>は</sup>ま<sup>た</sup>か<sup>し</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず  
 石<sup>いし</sup>を<sup>く</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず  
 り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り  
 牛<sup>うし</sup>の<sup>すけ</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず  
 か<sup>ら</sup>自<sup>みづか</sup>ら<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り<sup>の</sup>り  
 流<sup>なが</sup>る<sup>は</sup>ま<sup>た</sup>か<sup>し</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず  
 法<sup>しやう</sup>の<sup>た</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず

毛<sup>け</sup>子<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ぬ</sup>か<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ず  
 と<sup>と</sup>ろ<sup>ろ</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ  
 天<sup>あま</sup>の<sup>つ</sup>み<sup>み</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>  
 ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
 局<sup>きよ</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>  
 局<sup>きよ</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>

くさかたが又後人哉世所  
を仰 御後自十師御成  
く洞 入る世まて 向る虎  
る人子川 虎とて 虎うりし  
乾 酒さりのやのまを  
白ひる 酒やけのまを  
馬の 後さる 馬とて 馬  
くまに せまの 馬とて 馬

くさかたが又後人哉世所  
を仰 御後自十師御成  
く洞 入る世まて 向る虎  
る人子川 虎とて 虎うりし  
乾 酒さりのやのまを  
白ひる 酒やけのまを  
馬の 後さる 馬とて 馬  
くまに せまの 馬とて 馬

りこ藤を春の好山よ水も  
徒を花より人より花より  
や大ッホンシしく早一の海文

新の海方いあめ  
海の中なるおの海  
其のあめあめ  
海を改る海文  
文の海文

海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文  
海文の海文





Handwritten Japanese text in cursive style (Sōsho), consisting of approximately 15 vertical columns across two pages. The characters are dark and fluid, with some ink bleed-through visible. The text is densely packed and flows from right to left across the pages. Some characters are written with smaller, lighter strokes, possibly indicating corrections or secondary meanings. The overall appearance is that of a personal or artistic manuscript.











此の字の後の後防の少あるは  
二つと平らに後防たしるは  
極楽の心は平らに平ら  
受ればが善の善のその所  
虎も中の中の中  
二つと平らに後防たしるは  
二つと平らに後防たしるは

此の字の後の後防の少あるは  
二つと平らに後防たしるは  
極楽の心は平らに平ら  
受ればが善の善のその所  
虎も中の中の中  
二つと平らに後防たしるは  
二つと平らに後防たしるは





